



JPBAプレイヤーズドリームマッチ2022

10月11～16日 ドリームスタジアム太田

藤井信人が“古巣に錦”の通算7勝目！

1勝1敗で9・10プレーオフにもつれ込んだ優勝決定戦。藤井は庄司の4連発で原口を退け、祝福の拍手を送るギャラリーに万感の表情で応えた。



▲かつての上司である佐藤則明社長の祝福と対いに思わず涙する場面も(カメラ:馬場高志)

JPBA男子選手会による手作りの夢舞台『JPBAプレイヤーズドリームマッチ2022』は、昨年の第1回大会(21年11月26～28日、スポーツ名古屋)から会期(3日→6日)、優勝賞金(120万円→300万円)などあらゆる面でスケールアップ。325名のプロがエントリーして争われた長丁場の“最強男子決定戦”は藤井信人(52期・フリー/ハイ・スポーツ社)が制し、以前の所属先に錦を飾った。(主催:JPBA男子プロボウラーズ選手会/特別協賛:ドリームスタジアム太田、アマカスグループ)



▲準決勝敗退の2名。昨年の準Vから一歩後退の高田浩規(左)は「東海オープン」の優勝がまぐれだったと言わない。2勝目を向けてコッコッとやっている最中なので、この結果は上出来かなと思っ、ビッグゲーム連発の藤井に完敗の森本も「去年は2連戦負けだったので、ファイナルの舞台に立つことができたのはうれしい」とともに満足気だった。

Vロードはタフな道のり

3日間開催だった昨年は、予選9Gのみで即決勝トーナメント(1G毎の勝敗で争う2Gマッチ×5回戦)という競技フォーマット。初代王者に輝いた川添奨太は予選免除のシードプロで、Vロードは最短の10Gだった。

6日間開催となった今年は、予選のゲーム数が一気に増えて30G(1R6G、2R24G)となり、決勝T進出枠も24名から48名に拡大されて2Gマッチ×6回戦に。オイルパターンもショートとロングの2パターンで行われ(決勝Tはミディアム。昨年は大会を通じてミディアムだった)、Vロードは最長で42G、最短でも34Gと、“最強男子決定戦”にふさわしいタフな道のりへと変更された。

大会前のポイントランキン

グが1位で、予選第2Rから登場した藤井は、ショートコンディションの前半12Gを2767、同ロングの後半12Gを2701でまとめ、1回戦がシードとなる総合3位で決勝Tに進出。結果的に最短のVロードを歩んだ。

決勝Tの藤井は、斉藤征哉との3回戦が1勝1敗で9・10ブ

レーオフでも決着がつかず、ワンショットプレーオフにまでもつれ込んで肝を冷やしたが、藤村隆史との2回戦、新城一也との4回戦はいずれも2G連勝。準決勝は278・267のハイスコアで森本健太を圧倒して“魅せた”。

優勝決定戦の相手は、今年デビューの新人ながら9月の



▲二球一球最後まで強気で攻めることができた。今回優勝した勢いに乗って、圧倒的な強さでトップ(ランキング1位)を獲得したいと藤井



▲惜しくも2勝目を逃した原口は「自分としてはいい内容のボウリングができたと思うが、それを上回る藤井さんの技術と勢いに圧倒された」とのコメントに悔しさをにじませた

MKチャリティカップで早くも初勝利を挙げた原口優馬。藤井とは対照的に48名中の47位で決勝Tに進出した原口は、1回戦～準決勝の5試合を、すべて9・10プレーオフを制しての勝ち上がり。アマチュア時代からかわいがっている後輩だが、その勝負強さは脅威といえた。

1G目は、両者とも大会の進行につれて先に延びたオイルへの対処に手間取り、お互いに1ミスをして僅差の接戦となったが、10フレをパンチアウトした藤井が1ピン差で制して先勝した。

2G目は、序盤に4連発を決めた原口が終始リードを保って雪辱し、またも9・10プレーオフに持ち込んだが、中盤以降の

勢いは藤井が上。1G目同様、10フレをパンチアウトした藤井はプレーオフでもストライクを4つ並べ、原口を振り切った。最後は両者の“アジャストのタイミング”が明暗を分けた格好だ。

「古巣のお客様に応援してもらって、予選から1ゲームも集中力を切らさずに投げることができたし、最後まで強気で攻めるボウリングができた。今年はランキング1位という目標を掲げているので、それに向かって突き進んでいきたい」と藤井。3月の関西オープンに続く今季2勝目、通算7勝目で古巣に錦を飾ったその両目は、終始潤みっぱなしだった。

優勝ボール: STORM(ハイ・ス

●決勝トーナメント 優勝決定戦

1G目									
藤井 信人									
9	2	3	4	5	6	7	8	9	10
20	40	60	79	88	116	136	154	174	204

原口 優馬									
9	2	3	4	5	6	7	8	9	10
20	40	57	66	95	115	134	154	183	203

2G目									
藤井 信人									
9	2	3	4	5	6	7	8	9	10
20	39	58	78	108	138	166	186	206	236

原口 優馬									
8	2	3	4	5	6	7	8	9	10
20	50	80	109	129	149	179	208	228	247

●準決勝・決勝

藤井 信人	278・267	204・236 (60)	優勝
森本 健太	216・215	279・205 (37)	藤井 信人
高田 浩規	203・247 (38)	268・240 (50)	
原口 優馬			

2年目の夢舞台は見どころ満載！新設のジュニア大会也大盛り上がり

JPBA男子選手会の単独主催となり、会期が6日間となった今大会ではジュニア大会が新設され、最終日のプログラムに組み込まれた。まず、プロとジュニアボウラーがペアを組んでのダブルス戦(2×3G)が小・中・高の3部門に分かれて実施され(各部門6チーム参加)、さらに各部門の個人スコア上位2名のジュニアボウラーが1Gマッチで優勝を争った。各部門の結果は以下のとおり。

●小学生の部

田中謙臣287:202小松秀誠

●中学生の部

小林由瑚223:189網代羅夢
※網代選手は女子(HC10)

●高校生の部

渡邊 楓228:193室井海里
ちなみに、小学生の部優勝の田中選手(両手投げ)はスタートから10連発の準パーフェクトでギャラリーをどよめかせ、プロの優勝決定戦を前に会場を大いに盛り上げた。

さらに、ラスト3日間のハーフタイムには“ボウリング大好きアーティスト”Bro.KORN氏のワンディライブ(14日)、太田

東高チアリーディング部のスペシャルパフォーマンス(15日)、石橋お囃子会による和太鼓生演奏(16日)が行われ、“夢舞台”に華やかな彩りを添えた。

ゲーム中のカラフルな照明、リズムミカルなBGMとストライク時の音効、MC実況等の演出も昨年以上にブラッシュアップ。来年はどんな

趣向で見せてくれるのか、選手会の“仕掛け”が今から楽しみだ。



▲会場入口前の駐車場に横付けされたステージトラックでジュニア大会参加の選手・関係者が賑やかに記念撮影。同所では大会のパブリック・ビューイングも実施された



《今月の表紙》①ドリームマッチ第2代王者・藤井信人②中学生の部優勝の小林由瑚選手③高校生の部優勝の渡邊楓選手④プロ&ジュニアボウラーによるダブルス戦のひとコマ。写真は小学生部門の安里秀策&田中謙臣チーム⑤小学生の部優勝の田中選手に優勝盾を授与する川添奨太選手会長⑥地元の「石橋お囃子会」による和太鼓の生演奏